

煎茶—鼎—

Sencha — Ding (tripod) —

田畑潤

Jun Tabata

はじめに

中国古銅器もしくはそれを祖形としたものが煎茶席のしつらえの中にみることができる。^{かなえ}鼎・^{れき}鬲・^き簋などの食器は火炉として、^{そん}尊・^こ觚・^か盃・^{ほう}甗・^{ゆう}卣・^{じこう}兕觥などの酒器は花器として、温酒器の^{しやく}爵は香炉として用いられ、また展観席に陳列されていることが茗讌図録から読み取れる（田畑 2016）。本論では、中国古銅器の中でも最も重要な位置にあった鼎について取り上げる。鼎の出現とその役割について、考古資料から整理するとともに、鼎にまつわる伝承をまとめ、鼎の本質を概観していく。また、明治・大正時代を中心とした茗讌図録にみられる鼎を取り上げ、煎茶席における意味や役割について述べていく。なお、本論は、煎茶道売茶流第 98 回教授者会で講演した「青銅器煎茶—鼎—」の内容を再構成したものである。

1. 鼎の出現とその役割

後漢(100 年頃)の許慎が著した『説文解字』鼎部に「鼎は三足で両耳がつき、五味を調和させる宝器(烹器)である。夏王朝の禹が九牧の銅をあつめ、鼎を荆山の下で鑄造した。山林川沢に入っても、螭魅蝮蝮にあわず、天の幸いを享受する。(註 1)」とある。

鼎の文字は殷代甲骨文字や金文(青銅器銘文)にみられ(図 1)、青銅器に自銘があることから上記にいう三足両耳で鍋形の胴部を持つ器を鼎と呼んでいる。また、鼎と同じく三足の煮炊具である鬲という器物もあるが、鼎は胴部と脚部に明確な境があるのに対し、鬲は胴部と脚部が続き明確な境がないものとする(註 2)。

中国新石器時代において、すでに煮炊きをする三足の土器が出現している。新石器時代中期、黄河中流域の裴李崗文化において、鼎と呼ばれる深腹円底盆状の胴部を持つ三足器がみられる(図 2)。新石器時代中期以降、三足鉢・三足盆・三足罐と、三足が付く器は、下から火をかけ煮炊きをする標準の器として中国各地で出現している。三足の土器の中に鼎と呼ばれるものがしばしばみられるが、これら新石器時代の土器の鼎については青銅鼎との形態の類似から鼎と呼ばれ、両立耳が無いのが特徴である。

青銅鼎の中で最も古いものは、中国最古の王朝とされる夏代の二里頭遺跡から出土したものである(図 3)。また、二里頭遺跡においては土器の鼎の中にも従来みられなかった立耳を持つものもみられる(図 4)。殷代二里岡文化期に出現する青銅方鼎に似ることから、夏代二里頭文化期にも青銅方鼎が存在していた可能性があるが、未だ発見には至らない。二里頭文化期に文字資料もなく、当時から鼎と呼んでいた

た確証はないが、殷周青銅器の鼎とも形式的につながりがみられる。

青銅器が最も発展する殷周時代において、鼎は最も重要な器物であった。1939年に安陽武官村で発見された殷代後期の后母戊鼎は、高さ133cm、重量832kgもの大型方鼎で、中国国家博物館に所蔵されている(図5)。これまでに発見されている中国古銅器の中で最重量のものであり、青銅器の中でも鼎が象徴的なものであることがわかる。周代に入ると、青銅器は礼器(祭器)としての性格を強め、その器種構成や数量などから身分秩序を示す指標として用いられ、鼎はその象徴的器物であった(田畑2016)。鼎の数量と身分等級について言及しているのは、『春秋公羊傳』桓公二年の後漢の何休による「礼を行うにあたり、天子は九鼎、諸侯は七鼎、卿大夫は五鼎、士は三鼎を用いる。」という注である(註3)。また、唐の徐彦の疏に、土階級の冠礼、喪礼には一鼎を用いることが記されており(註4)、土階級は三から一鼎を用いると考えられる。用鼎制度・列鼎制度の根幹となるものであるが、中国古代夏殷周時代の礼制をまとめた『周禮』『儀禮』『禮記』、いわゆる三禮には鼎の数と等級との直接的な等差的関係はみられない。鼎と等級の数量関係については、郭宝鈞氏が戦国時代の山彪鎮1号墓出土の考古資料を通じて列鼎制度を提唱した後(郭1959)、俞偉超・高明両氏が西周・東周時代における墓出土の青銅鼎の数から諸侯九鼎、卿大夫七鼎、下大夫五鼎、士三鼎あるいは一鼎という用鼎制度を示した(俞・高1978)。列鼎制度が確立した時期について、研究者の見解は様々である。西周時代前期から使用されたとする説(郭1981)、西周時代中期から制度化されたとする説(杜1976、北京(鄒衡)1979)、西周時代中期後半に制度として大きく変化したという説(曹1998)、西周時代後期から春秋時代になって制度化されたとする説(王1986)と各研究者の視点によって異なっている。岡村秀典氏は列鼎制度の問題に対し、鼎の数量と身分については固定的な制度が文献からは断言できず、等差的な用鼎数や用牲は祭祀や儀礼のちがいによっても変化したものであり、鼎の大小や型式、牲肉をふくめた複雑な用鼎の規範があったであろうとしている(岡村2003、2005)。黄河中流域における西周時代後期から春秋初期にかけての鼎の出土状況からみると、墓1基あたり1・3・5・7・9点と奇数の組み合わせが典型的であることがわかり、列鼎制度が相当程度規範をもったものとして展開していたと考えられる。(田畑2012)。

黄河中流域のいわゆる中原と呼ばれた夏殷周の王朝中心地で青銅器が発展する一方、長江中・下流域を中心に、青銅器を象った原始磁器と呼ばれる灰釉陶器が流行した。いわゆる磁器への過渡期的な段階としての施釉したやきものであり、還元焰焼成で緑がかった青磁系の色を発することから原始青磁とも呼ばれている。殷周時代の原始青磁の中に、鼎をはじめとする三足器はほとんどみられないが、戦国時代以降は青銅器が徐々に衰退し、青銅鼎を模した土器や原始青磁が重要な役割を果たすようになる。愛知県陶磁美術館所蔵の原始青磁有蓋鼎を例に紹介したい。図6は、戦国時代前期から中期の青銅器を模した鼎で、胴部の横からL字状に立耳が付き、獸蹄形の三足を持つ。蓋や胴部にはS字状の紋様が印文で施されている。身分の高い人物の墓へ副葬したと考えられ、おそらくは身分に合わせて同形の鼎を複数作成していたであろう。この種の原始青磁の鼎が煎茶席に用いられたという記録はみられないが、後に紹介するように火炉として用いるのに適する形状、大きさである。

2. 鼎に関する伝承

鼎に関連する伝承から、夏殷周三代の認識はもとより、その後出現する中国文人たちの共通理解としての鼎の本質を捉えていきたい。

・鼎の軽重を問う

『春秋左氏傳』の宣公三年（前715年）に、楚の莊王が周の賢臣である王孫滿に周王室の鼎の大小軽重を尋ねたくだりがある。

「楚子は鼎の大小軽重を王孫滿に尋ねた。王孫滿は、「鼎の大小軽重は鼎本体にあるのではなく、それを持つ人の徳によるものである。古代、夏王朝に徳があった時代に、遠方から貢物を献上して百物の形象を示した鼎を鑄造し、民に神異と怪異を見分けられるようにした。ゆえに民は山林川沢に入っても、螭魅罔兩にあわなかった。上下が協調し、天のたすけを受けたのである。夏の桀王に悪徳あり、鼎が殷王朝に遷り、六百年続いたが、殷の紂王が暴虐であったため、鼎は周王朝に遷ったのである。鼎を持つ天子の徳が明らかであれば鼎は小さくても重く、その徳が乱れていれば鼎は大きくても軽い。天が徳を天子に与えても限度があり、周の成王が都に鼎を定めて周が何年続くか占ったところ、三十代七百年という結果だった。今、周の徳が衰えているといっても天命はいまだ改まっていないので、鼎の軽重について問うことはなりません。」といった。（註5）」

諸侯である楚の莊王が、王権の象徴である鼎を手中におさめようとしたエピソードであり、周王室に対する権威の発露として表わされている。上述の『説文解字』鼎部と同様に、夏王朝の禹が鼎を鑄造したとのくだりがある。いわゆる「九鼎」を指すが、夏殷周三代通じて断定できる考古資料はみられない。後の時代に鼎を王権の象徴として捉え、中国最古の王朝である夏王朝に象徴的な九鼎が造られたという伝説が創られたのであろう。ここで重要なことは、古代において容易に動かせない巨大な鼎が造られていることから、宗廟等で定められた位置に置き、本体を動かさずに用いることが基本であり、鼎＝王朝が不動であることを示すことに意義があるということである。

・泗水周鼎引き上げ失敗伝説

『史記』封禪書に、「秦が周を滅ぼした際、周の九鼎を手に入れたとされるが、宋の太丘の社が失われた時に、鼎が彭城の下を流れる泗水に沈んだ。」とある（註6）。秦の始皇帝の時代、泗水に沈んだ九鼎を引き上げるといふ故事が伝わっている。『史記』秦始皇本紀に、「始皇帝が東土から還るにあたって彭城を過ぎた。齋戒して祈祷し、周が滅んだ時に沈んだ九鼎を泗水から引き上げようとした。千人もの人を用いて水に潜って求めさせたが得られなかった。」とあり（註7）、また、『水経注』巻二十五の泗水には、「周赧王四十二年、九鼎が泗水に没した。秦始皇帝の時、鼎が泗水にみられた。始皇帝自ら徳が三代に相当すると大いに喜び、数千人に命じ、水に潜って求めさせたが得られなかった。いわゆる鼎伏である。また、綱を用いて鼎を引き上げられなかったのは、龍がその綱を噛み切ってしまったからである。」とある（註8）。図7左は山東省嘉祥県にある武氏祠石室の画像石で、滑車を用い鼎を引き上げている左右の人物たちが龍により綱を切られ転倒している様子が刻まれている。水中からは船に乗った人物が棒で鼎を押し上げようとしている。図7右は江蘇省徐州大廟1号墓の画像石で、鼎を引き上げる構図について、中央に力士、左列に綱をかぶった女性、右列に爵弁をかぶった男性が配され、水中の鼎から龍が顔をのぞかせて右の綱をかみ切っている。

この泗水周鼎引き上げ失敗が、漢代の画像石中にみられ、その多くは山東省を中心とした中国東方から出土している。秦の始皇帝が王権の象徴たる九鼎を求めても入手できなかったという事件は、史実だとしても秦朝側が積極的に記録する事件ではなく、秦に征服された東方の地でむしろ積極的に伝承されていったものと考えられる（鶴間1994）。始皇帝は紀元前210年に死去し、2代胡亥も紀元前207年に

死去してしまい、秦は統一後わずか15年で滅んでしまった。王権の象徴たる鼎の獲得に失敗したということと、王朝が極めて短命であったことが強く結び付けられている。

のちに九鼎は二人の皇帝によって実際に鑄造される。一人は唐の高宗の皇后となり、後に武周朝を建てた則天武后であり、もう一人は宋の徽宗皇帝である。徽宗皇帝は、三代の銅器の最大のコレクターになったばかりでなく、当時の銅器の復古にも力を入れ、その最大のスポンサーにもなった人物でもあり、文人皇帝として名高い。崇寧三年（1104年）に九鼎を鑄造し、政和八年（1118年）にも九鼎を再鑄造していることが『宋史』に記されている。この時鑄造された鼎は九つで、九成宮という殿におさめ、鑄鼎の地にも宝成宮を建て、黄帝、夏禹、周成王や周公旦、召公奭など三代の賢臣を祀っている。三代への憧憬と王権の移ろいが「鼎」という形となってあらわれており、当時の文人の精神にも深く刻まれていることが想像される。

3. 『茶経』にみられる「鼎」

これまで鼎の出現から、最盛期であった夏殷周三代、そして秦の始皇帝と九鼎の伝承から、鼎の変遷と象徴される意味を捉えてきた。漢代以降、鼎の発見は元号を変えるほどの大事とされたものの、長らく鼎をはじめ中国古銅器が顧みられない状況が続いていた（田畑 2016）。ここでは、唐代、陸羽を茶祖として始まる煎茶文化における鼎について言及していきたい。

陸羽が760年頃に記した『茶経』に、煎茶器としての鼎の記述がみられる。「四之器」の風炉（灰承）に次のようにある。

「風炉は、銅や鉄で鑄る。古代の鼎の形のようなものである。厚さは三分、縁の広さは九分、六分は中を虚にして、鍍塗りとす。およそ足は三本あり、古文二十一字が書いてある。一つの足には「坎が上に、巽が下に、離が中に（坎は水、巽は風、離は火の卦であり、火に風を与えて煮炊きする鼎を示す。易の火風鼎。）」とあり、一つの足には「体は五行を均しくし、百疾を去る」とあり、一つの足には「聖唐が胡を滅ぼした明年に鑄る（註9）」とある。その三本の足の間に、三個の窓を設け、底の一個の窓は、通風や燃えかすを落とす所である。窓の上に古文で六字が書いてあり、一つの窓の上には「伊公」の二字を書き、一つの窓の上には「羹陸」の二字を書き、一つの窓の上には「氏茶」の二字を書いている。すなわち「伊公は羹、陸氏は茶」となる。（註10）」

古代の鼎の形とあるが、『茶経図考』の風炉（図8）をみると、前節で述べた鼎と異なる形状であることがわかる。殷周時代の青銅鼎の中にも開閉式の扉を持ち、炭をくべるような構造を持つものもみられる。ただし、青銅鼎の中でも特殊な形状で数量も少ないことから、『茶経図考』にみられる風炉は中国古代の青銅鼎を直接継承するものとは考えにくい。また、『図説・煎茶Ⅰ－伝統と美』において、風炉の説明に図9が用いられている。『茶経図考』の風炉に比べ、口縁横から両立耳が付く典型的な鼎に近い形状になっているが、やはり中国古銅器とは異なっていることがわかる。

『茶経』が著された直後の晩唐には、李商隱の七言絶句に「小鼎煎茶面曲池、白須道士竹間棋。何人書破蒲葵扇、記著南塘移樹時。（小鼎に茶を煎じ曲池に面す、白須の道士竹間に棋す。何人か蒲葵扇に書破し、南塘に樹を移す時を記して著す。）」とあり、茶を煎じる器に鼎が用いられていたことがわかる。また、晩唐の皮日休の「茶中雜詠」及び陸龜蒙の「奉和襲美茶具十詠」の十篇の七言律詩の中に「茶鼎」という言葉がみられるが、おそらく上記のような三足器を鼎として用いていたのであろう。

東氏は、「伊公羹陸氏茶」の六字について、陸羽が自身の茶を伊尹の羹と並べて自賛したとする先学の説を引きながらも、より深く理解するために、「伊公の羹」とは一体どんな羹であったのか、この羹はそれまでの「羹」と較べてどこが新しくなったのか、そして、「陸氏の茶」とは一体どんな茶であったのか、それは陸羽時代以前の茶と比較していかなるところが改革されていたのか、という問題がまず究明さるべきであろう、としている。「伊公の羹」は、五味の調和した滋味の吸い物であるとともに多種類の生薬を配合した煎じ薬であり、料理史上においてのみならず医薬史上においても画期的なものであり、陸羽は、多種の薬草の入っている配合茶から茶一味だけを取り出し、病気の予防にもなる日常飲料としての茶の地位を確立させた。陸羽はこのことを自負し、これを人にも知らしめようとの意図から、煎茶用の風炉を伊公が用いた古代の鼎の形に設計し、これに「伊公羹」と並べて「陸氏茶」と刻み込み、飲茶の新時代を堂々と宣言した、と結論付けている（東 1993）。

ここで注目すべきは、鼎と関わりのある人物として伊公が書かれていることである。伊公とは、殷王朝初代湯王に仕えた名臣である伊尹のことを指す。『史記』殷本紀に「伊尹、名を阿衡とする。阿衡は殷の湯王に仕えようとしたが手立てがなかった。そこで湯王の妃の筋にあたる有莘氏の媵臣となつて、鼎や俎を背負い、美味い料理を作り湯王に取り入り、王道を成し遂げた。」とある（註 11）。伊尹は、鼎を用いた料理の腕で湯王の信頼を得たとされ、夏王朝最後の王である桀を打ち破り、殷王朝の成立に大きく関与している（註 12）。湯王亡き後も歴代の殷王である外丙、仲壬、太甲、沃丁に仕えており、時には暴君であった太甲を桐宮に追放し摂政するという賢臣であることが知られる（註 13）。宋代以降の文人が三代（夏殷周）への憧れをもって中国古代の青銅器を収集していたことに触れたが（田畑 2016）、唐代の陸羽がすでに殷代の名臣である伊尹を取り上げ、自身を茶祖とするのに比肩していることは興味深い。

4. 煎茶席における鼎

日本における煎茶席に鼎がいつごろから使用されていたかについては特定することは困難である。鼎を中心とした中国古銅器は、宋代以降に将来品として平安貴族や鎌倉以降の将軍家や大名家にもたらされ、唐物としての中国古銅器の多くは仏具として用いられ、その後煎茶席に飾られるようになった（田畑 2016）。ここでは江戸時代後期、幕末にはじまり明治、大正時代に隆盛した茗謙図録から、青銅鼎を中心に、陶磁器や玉器、木製等の鼎を抽出し、煎茶席における機能や展開をまとめていく（註 14）。

茗謙図録における鼎の初出は山本梅逸の『青娛帖』（1844（天保 15・弘化元）年）であり、蓮池を臨む亭内の卓に並べられた中国古銅器の中に方鼎と円鼎が、また、台座の上に置かれ香炉として用いられた円鼎がみられる。これらは「明清倣殷周青銅器」である（田畑 2016）。

以降の茗謙図録の中に詳細な記載があり、煎茶席及び付随する席において香炉あるいは火炉として扱われた鼎についてまとめていく（表 1・2）。

1852（嘉永 5）年に、京都八坂耕雲閣において開催された茶会を著した『茗謙品目』中には香炉に用いられた金属製の鼎 3 点が確認できる。第五席の玉禅室主にみられるように、香炉としての鼎はみな、花瓶や香盒、文房具等とともに卓や机の上に置かれており、全体のしつらえも唐物に統一されている（図 10）。

1862（文久 2）年、売茶翁高遊外の百周忌と青湾碑落慶のために大坂網島で催された青湾茶会は、翌

年に田能村直入の編集によって『青湾茶会図録』天・地・人三分冊として刊行された。4月に催された第四、五席と7月の第二、三席において、計6点の鼎が香炉として用いられた。青磁2点と銅器4点があり、みな小型である（註15）。第四席「発汗」の副席では、明の万暦年間の銅器製作の名工とされる胡文明作の小鼎が花瓶、香とともに古漆器盆上に置かれている（図11）。また、第六席では鼎足の器が1点火炉として登場している（註16）。守屋氏は、4月の茗讌はかなり意図した強烈な中国趣味・ブランド志向であり、7月の茗讌は和物煎茶器を取り混ぜて全体としての調和が図られた落ち着いた中国趣味であると評している（守屋2007）。

『円山勝会図録』は、1875（明治8）年11月、東山山麓の円山において京都鳩居堂の熊谷直孝（酔香）の追善のための煎茶会を記したものである。茶席数は25席、6箇所の展覧席には475点の書画を陳列、掛軸の総数は茶席と合わせて、全国22地域、132名、点数は500点にもものぼる。書画の出品数の増加から、煎茶席に展覧会という要素が新たに組み込まれた茶会であることが分かる。香炉に用いられた鼎は8点みられ、内訳は金属製4点（銅3・鉄1）のほか、白磁製3点、玉製1点である。白磁は交趾窯1点と高麗窯2点との記載がある。名称については「鼎」とするもののほか、「鼎式」とするものや「彝式」とするものがみられる（註17）。煎茶飾りとして、床、軸前に花瓶や香盒、盛物等とともに置かれている。火炉として用いられた鼎も8点みられる。金属製は「古銅」と記載されるものが3点、「宣銅」が1点である。「古銅」は殷周時代の饗饗紋が施されているものもあるが、倣古銅器と考えられ、「宣銅」は明の宣徳期以降に製作された宣徳銅器、又は宣徳銅器の古色を表現したものと考えられる。金属製のほかに、青磁2点、白磁1点、木製1点が用いられている。掛けられる湯鐘とのセット関係に明確な規定はみられないが、主に白泥のものと金属製のものに分けられ、上手の提梁式と横手の急須式の両者がみられる。鴨厓之水楼の煎茶席では、青磁鼎式火炉に純銀饗饗紋直式湯鐘が掛けられており、ともに中国古銅器からくるものであり興味深い組み合わせである（図12）。鼎の使用が14席16点と比較的多くみられるこの茶会において、同一の席に香炉と火炉に鼎を用いる事例は、業山堂が茗主を務めた鴨厓之水楼と、大狂堂が茗主を務めた鴨厓之水楼の茶室の2例のみである。

1874（明治7）年、山中吉兵衛の追善供養の煎茶会をまとめた『青湾茗讌図誌』瑞・草・魁三分冊は、中国古銅器を煎茶席に取り上げた中心人物の一人、山中吉郎兵衛（簪篁）が手掛けた茗讌図録であり、数々の中国古銅器が煎茶席に飾られていることがわかる（田畑2016）。鼎については2点の銅器のほか、白玉1点、青磁1点が香炉として記載されている（註18）。火炉としては4点、内訳は「古銅」2点と青磁、白磁各1点が確認できる（註19）。組み合わせられる湯鐘は、白泥2点のほか、金属製2点があり、提梁式と急須式の両者がみられる（註20）。第三席の茶席は、唐物で統一されたしつらえの中に、殷周青銅器を忠実に模した古銅鼎を火炉として用い、黄金瓶提梁式湯鐘が掛けられている（図13）。

田能村直入華甲記念の茶会が1877（明治10）年3月11日、大阪幸町南陽園で開催されており、『直入翁寿筵図録』天・地・人三分冊にまとめられている。香炉としての鼎は6点みられる。銅器の鼎は4点みられ、うち殷周時代の饗饗文を施した鼎2点は倣古銅器、別2点も明の宣徳期以降に製作された宣徳銅器、又は宣徳銅器の古色を表現したものと考えられる。また、銅器以外に青磁と白磁の鼎が1点ずつみられる。火炉としての鼎は、殷周時代の饗饗文を施した倣古銅器1点で、磁器の湯鐘が掛けられている（図14）。

『淇水翁薦事図録』松・竹・梅三分冊は、1893（明治26）年に半田招鶴亭や中塾家を会場に催された

中埜又左衛門の先代追善の煎茶会をまとめたものである。鼎は2点みられ、1点は白玉製で、もう1点の嵌銀鼎式は、明代後期の名工である石叟の作とされる（図15）。茶席はみな唐物中心の茶具品目で、火炉としての鼎はみられない。

1908（明治41）年、大阪網島澱江一帯において高山箬篋の4回忌の供養として煎茶会が行われ、その様子が『澱江茗讌図録』乾・坤二分冊にまとめられた。香炉として用いられた鼎は4点あり、内訳は鉄製1点、白玉製2点、鈎窯磁器1点である。火炉は2点で、内訳は鈎窯磁器1点と青磁1点である。第十三席の昌隆社による煎茶席では、香炉に白玉共蓋鼎が、火炉として青磁繩耳鼎に白泥文政渡の湯鐘が掛けられており、一つの席に2点の鼎がみられる（図16）。

1909（明治42）年、椰川善左衛門の先代椰川雨竹翁の追薦茶会が大阪船場堺卯楼で行われ、『雨竹居士薦筵図誌』玉池署・石埭題としてまとめられている。香炉として用いられた鼎は5点あり、内訳は鉄製3点、建窯磁器1点、他1点である。図17は第四席の書画展観に用いられた方鼎である。図のみで香炉としての詳細は記されていないが、軸前に盆の上に置かれていることがわかる。軸は与謝蕪村、池大雅、岡田米山人・半江、野呂介石、青木木米、中林竹洞、田能村竹田、貫名海屋、頼山陽、山本梅逸、小田海僊ら日本の南画家の作品を中心としたものである。

『角山箬篋翁薦事図録』瑞・草・魁三分冊は、1919（大正8）年、大阪網島で山中吉郎兵衛（箬篋）の3回忌の茗讌をまとめたものである。香炉として用いられた鼎は2点で、内訳は鉄製1点、青磁1点である。第六席の煎茗席は唐物中心のしつらえで、軸前に南蛮鉄金象嵌方鼎が黒漆平卓の上に置かれている（図18）。

5. まとめ

前節に示した茗讌図録における青銅鼎について、「古銅」とされるものはみな明治30年代以前のものであり、倣古銅器と考えられる（田畑2016）。また、明治30年代以降の茶会において「古銅」のものは香炉や火炉に用いられておらず、日本国内有数の殷周青銅器が一同に並べられた、大正15年の『昌隆社記念茗讌図録』の第九席銅器陳列や煎茶席においても殷周青銅器の鼎はみられない。上記のことから、日本に殷周青銅器が流入した後の茶会において、殷周時代の青銅鼎を香炉や火炉として用いることは極めて限られていたと考えられる。

また、鼎の使用について、同一の席に香炉と火炉に鼎を用いる事例は『円山勝会図録』の中でみられた2例と、『澱江茗讌図録』中の1例と限られており、他の茶会ではどちらか1点に限られる。煎茶の担い手とされる文人の条件は士人とされることから、煎茶席において扱う鼎の数量も一鼎を基本としていたのではないだろうか。

煎茶における鼎の本質は、唐代陸羽の『茶経』にはじまり、三代への憧れを持つ文人に継承されていった。鼎を中心とした中国古代の器物は、夏の禹、殷の伊尹、周の周公旦、春秋時代魯の孔子など古の聖人を尊重することへつながり、文人たちの共通理解として煎茶の精神の根幹になっていることを象徴しているのである。幕末から明治・大正の日本の煎茶席においても、唐物中心の煎茶飾りに用いられる鼎は、その精神に基づいて用いられてきたことであろう。

註

- 1 『説文解字』鼎部「三足兩耳、和五味之寶器也。昔禹收九牧之金、鑄鼎荆山之下、入山林川澤、螭魅罔兩、莫能逢之、以協承天休。」
- 2 従来、鼎の脚は柱状の実足で、鬲の脚は袋状の空足という区別があったが、明らかに鼎の形状をしている青銅器、土器の中にも空足、半空足のものがみられることから、実足・空足が条件とはならない。
- 3 『春秋公羊傳』桓公二年何休注「禮祭、天子九鼎、諸侯七、卿大夫五、元士三也。」
- 4 『春秋公羊傳』桓公二年徐彥疏「士冠禮、士喪禮、皆一鼎者、士冠、士喪、略於正祭故也。」
- 5 『春秋左氏傳』宣公三年「楚子問鼎之大小輕重焉。對曰、在德不在鼎。昔夏之方有德也、遠方圖物、貢金九牧、鑄鼎象物、百物而為之備、使民知神姦。故民入川澤山林、不逢不若、螭魅罔兩、莫能逢之。用能協于上下、以承天休、桀有昏德、鼎遷于商。載祀六百、商紂暴虐、鼎遷于周。德之休明、雖小、重也、其姦回昏亂、雖大、輕也。天祚明德、有所底止、成王定鼎于郊廓、卜世三十、卜年七百。天所命也。周德雖衰、天命未改、鼎之輕重、未可問也。」
- 6 『史記』封禪書「秦滅周、周之九鼎入于秦。或曰宋太丘社亡、而鼎沒于泗水彭城下。」
- 7 『史記』秦始皇本紀「始皇還、過彭城、齋戒禱祠、欲出周鼎泗水。使千人沒水求之、弗得。」
- 8 『水經注』卷二十五 泗水「周顯王四十二年、九鼎淪沒泗淵、秦始皇時而鼎見于斯水。始皇自以德合三代、大喜、使數千人沒水求之、不得、所謂鼎伏也。亦云系而行之、未出、龍齒齧斷其系。」
- 9 胡は北方の異民族を示し、陸羽の時代に照らし合わせると「安史の乱」が想定される。755年から763年にかけて、唐の節度使・安祿山とその部下の史思明らによって引き起こされた大規模な反乱である。布目氏は「聖唐滅胡明年鑄」に記述について、肅宗、太上皇（玄宗）が長安に還った至徳二載757年に、元結が「大唐中興頌」を奉っており、また、同年に「収復京師詔」や「至徳二載収復兩京大赦」が発せられていることから、「滅胡」の年とみることが可能であるとし、翌758年を陸羽が風炉（鼎）を鑄造した年とみなしている（布目2001）。
- 10 「風炉。以銅、鐵鑄之、如古鼎形。厚三分、緣闊九分、令六分虛中、致其朽墮。凡三足、古文書二十一字、一足云、坎上巽下離于中、一足云、體均五行去百疾、一足云、聖唐滅胡明年鑄。其三足之間、設三窗、底一窗以為通飆漏燼之所。上并古文書六字、一窗之上書、伊公二字、一窗之上書、羹陸二字、一窗之上書、氏茶二字、所謂伊公羹、陸氏茶也。」
- 11 『史記』殷本紀「伊尹名阿衡。阿衡欲奸湯而無由。乃為有莘氏媵臣、負鼎俎、以滋味説湯、致于王道。」
- 12 『史記』殷本紀「夏桀為虐政淫荒、而諸侯昆吾氏為亂。湯乃興師率諸侯、伊尹從湯、湯自把鉞以伐昆吾、遂伐桀。…湯既勝夏、欲遷其社、不可、作夏社。伊尹報。於是諸侯畢服、湯乃踐天子位、平定海内。」
- 13 『史記』殷本紀「湯崩、太子太丁未立而卒、於是乃立太丁之弟外丙、是為帝外丙。帝外丙即位三年、崩、立外丙之弟中壬、是為帝中壬。帝中壬即位四年、崩、伊尹乃立太丁之子太甲。…太宗（太甲）崩、子沃丁立。帝沃丁之時、伊尹卒。既葬伊尹於亳、咎單遂訓伊尹事、作沃丁。…太甲、成湯適長孫也、是為帝太甲。帝太甲元年、伊尹作伊訓、作肆命、作徂后。帝太甲既立三年、不明、暴虐、不遵湯法、亂德、於是伊尹放之於桐宮。三年、伊尹攝行政當國、以朝諸侯。帝太甲居桐宮三年、悔過自責、反善、於是伊尹乃迎帝太甲而授之政。帝太甲修德、諸侯咸歸殷、百姓以寧。伊尹嘉之、乃作太甲訓三篇、褒帝太甲、稱太宗。」

- 14 器の名称について、茗讌図録により同一器種についても呼び方が異なっている。鼎について言えば、「火炉」、「涼炉」、「炉」、「鼎」と異なる名称がみられるが、形態及び使用法が同じであると考えられることから、文章中では「火炉」に統一する。また、湯鐘と湯罐については、金属器と陶磁器とで分けているが、茗讌図録の中には厳密に区別されていないものもある。文・表中の文字について、旧字体及び異体字・俗字のものは新字体や通用字形に改めている。
- 15 第二席の香炉は、器名に黄銅鼎とあるが、図では三足器ではなく両耳壺が描かれている。また、第三席の香炉も、器名に古銅小鼎とあるが、図では脚座に乗った壺が描かれている。
- 16 鼎足とあるが、図では鬲足形の三足であり、胴部に窓を有する立耳のない炉が描かれている。
- 17 器名を「彝式」としている古銅嵌金彝式小炉については、図から三足に両立耳の付く小円鼎とみなすことができる。また、器名を「鼎式」としている青玉方鼎式は、両耳が胴部中央に付く把手の形状をしており、高麗窯白磁小鼎についても、両耳が胴部中央に付いており、立耳を持つ典型的な鼎とは異なっている。
- 18 器名を「彝式」としている白玉彝式、宣徳銅彝式については、図から三足に両立耳の付く小円鼎とみなすことができる。
- 19 清水窯青蒼磁は器名に鼎がみられないが、図から短い三足に両立耳の付く円鼎とみなすことができる。
- 20 白泥急須式湯鐘は図から提梁式と考えられる。

参考文献

日文

- 一般財団法人文人画研究会 2015 「『茗讌品目』 解題」 一般財団法人文人画研究会 『別冊 読画塾 賣茶流 家元友仙窟開創 100 周年記念特集 / 山本梅逸茗讌品目の世界』
- 岡村秀典 2003 「先秦時代の供犠」 『東方學報』 京都第七十五冊
- 岡村秀典 2005 「周代の身分制」 小南一郎編 『京都大學人文科學研究所研究報告 中国文明の形成』 朋友書店
- 近藤喬一 2006 「九鼎と金人—中国古代王権のシンボル—」 『アジアの歴史と文化』 第 10 輯、山口大学 アジア歴史・文化研究会
- 田畑潤 2012 「黄河中流域における西周時代後期葬制の変化と拡散」 『中国考古学』 第十二号 日本中国考古学会
- 田畑潤 2016 「煎茶—中国古銅器と日本・中国の文人文化—」 『愛知県陶磁美術館研究紀要 21』
- 鶴間和幸 1994 「秦始皇帝諸伝説の成立と史実—泗水周鼎引き上げ失敗伝説と荊軻秦王暗殺未遂伝説—」 『茨城大学教養部紀要』 第 26 号、茨城大学教養部
- 東君 1993 「『茶経』 研究の諸問題」 『野村美術館研究紀要』 第二号、野村美術館学芸部
- 布目潮風 1982 「中国における飲茶の普及」 講談社編 『図説・煎茶 I —伝統と美』 講談社
- 布目潮風 2001 『茶経詳解 原文・校異・訳文・注解』 淡交社
- 布目潮風 2012 『茶経全訳注』 株式会社講談社
- 守屋雅史 2007 「『青湾茶会図録』 にみる煎茶器の取り合わせについて」 『野村美術館研究紀要』 第十六号、

野村美術館学芸部

茗讌図録（時代順）

- 山本梅逸 1852 『茗讌品目』
田能村直入 1863 『青湾茶会図録』
熊谷久兵衛 1876 『円山勝会図録』
山中箒篁堂 1875 『青湾茗讌図誌』
田能村小斎（順之助）1881 『直入翁寿筵図録』
中埜又左衛門 1894 『淇水翁薦事図録』
山中箒篁堂 1909 『澗江茗讌図録』
柳川善左衛門 1913 『雨竹居士薦筵図誌』
山中吉郎兵衛 1922 『角山箒篁薦事図録』
昌隆社 1926 『昌隆社記念茗讌図録』

中文

- 北京大学歴史系考古教研室商周組 1979 『商周考古』 文物出版社
曹璋 1998 「從青銅器的演化試論西周前後期之交的礼制变化」 『周秦文化研究』 陝西人民出版社
杜迺松 1976 「從列鼎制度看“克己復礼”的反動性」 『考古』 1976 年第 1 期
郭宝鈞 1959 『山彪鎮与琉璃閣』 科学出版社
林澐 1990 「周代用鼎制度商榷」 『史学月刊』 1990 年第 3 期
王飛 1986 「用鼎制度興衰異議」 『文博』 1986 年第 6 期
俞偉超・高明 1978 「周代用鼎制度研究」 『北京大学学报』 1978 年第 1 期
中国社会科学院考古研究所二里頭工作隊 1992 「1987 年偃師二里頭遺址墓葬發掘簡報」 『考古』 1992 年
第 4 期
中国社会科学院考古研究所河南一隊 1984 「1979 年裴李崗遺址發掘報告」 『考古学报』 1984 年第 1 期
朱鳳瀚 2009 「第二章 青銅器的發現与研究史 第一節 兩漢至清代青銅器的發現与研究」「第三章 青銅器
的分類与定名 第二節 青銅器的名称、用途与器形的型式分類（一）」 『中国青銅器總論』（上）上海古
籍出版社
徐州博物館 2003 「江蘇徐州大廟晋漢画像石墓」 『文物』 2003 年第 4 期
朱錫祿編著 1986 『武氏祠漢画像石』 山東美術出版社



図1：鼎字（左：甲骨 右：金文）



図2：裴李崗遺跡出土 紅陶乳丁文鼎



図3：二里头遺跡出土 青銅鼎



図4：二里头遺跡出土 灰陶方鼎



図5：后母戊鼎



図6：原始青磁有蓋鼎

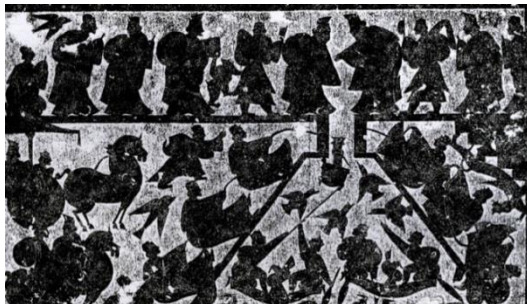


図7：漢代画像石にみられる泗水周鼎引き上げ失敗伝説

(左：山東省嘉祥縣武氏祠漢画像石

右：江蘇省徐州大廟 1 号画像石墓)

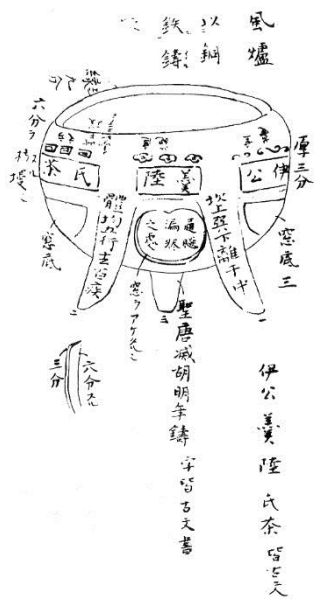


图8：『茶經図考』風炉

图9：『図説・煎茶 I - 伝統と美』風炉

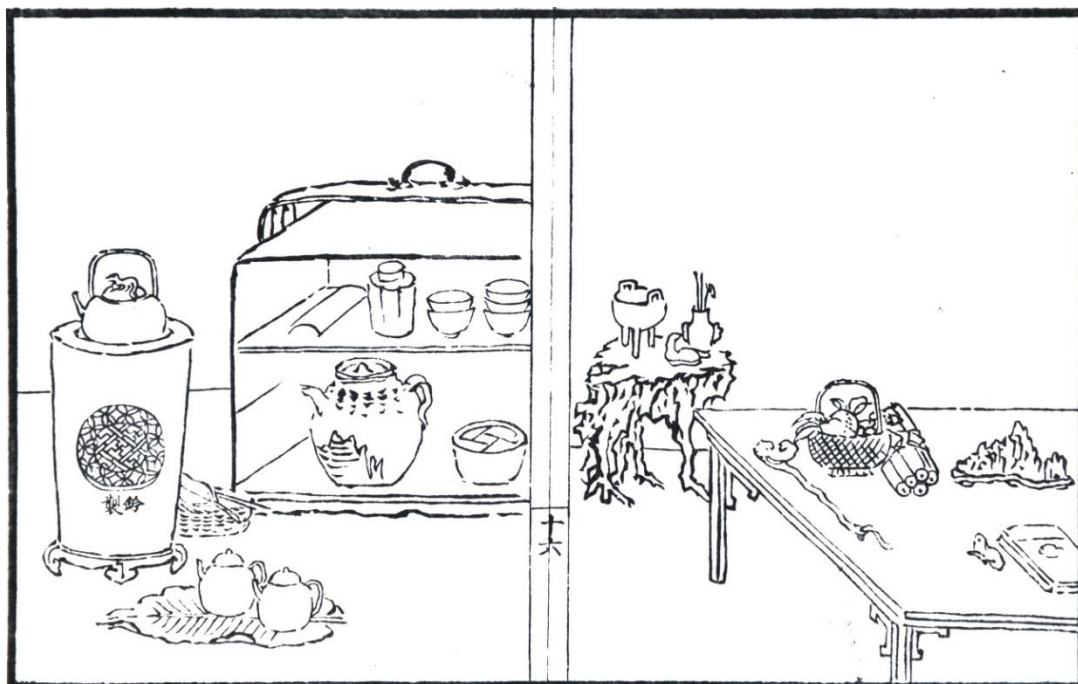


图 10：『茗讌品目』 第五 玉禅室主 香炉：嵌銀銅鼎



图 11：『青湾茶会図録』第四 発汗 副席 香炉：古銅 胡文明小鼎

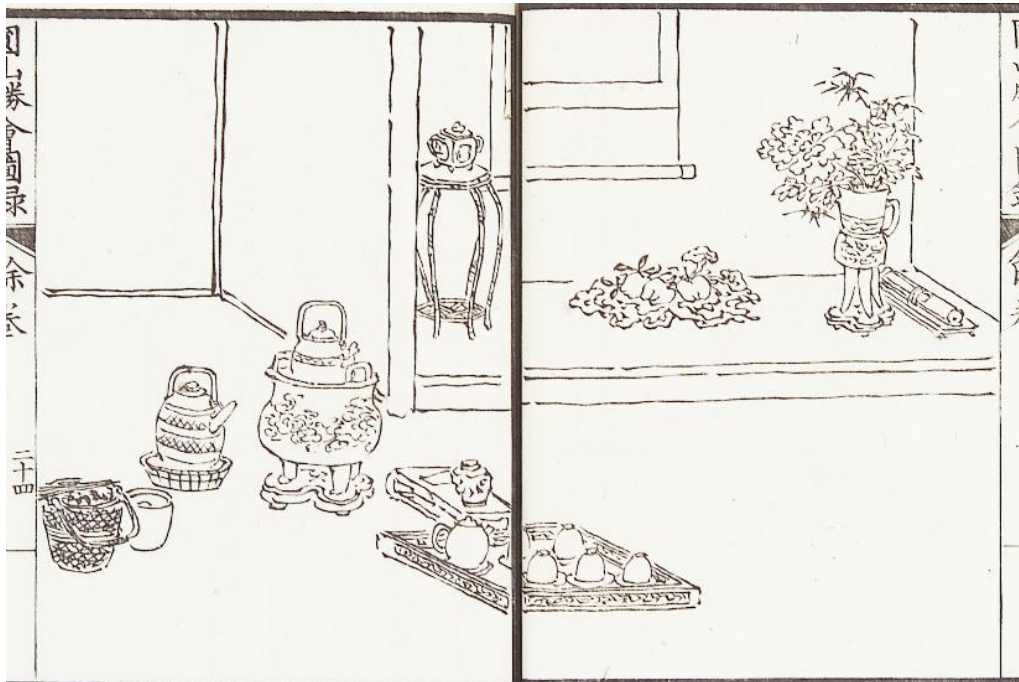


图 12：『円山勝会図録』鴨厓之水楼
 香炉：青玉方鼎式 火炉：青磁鼎式 湯罐：純銀饕餮紋卣式

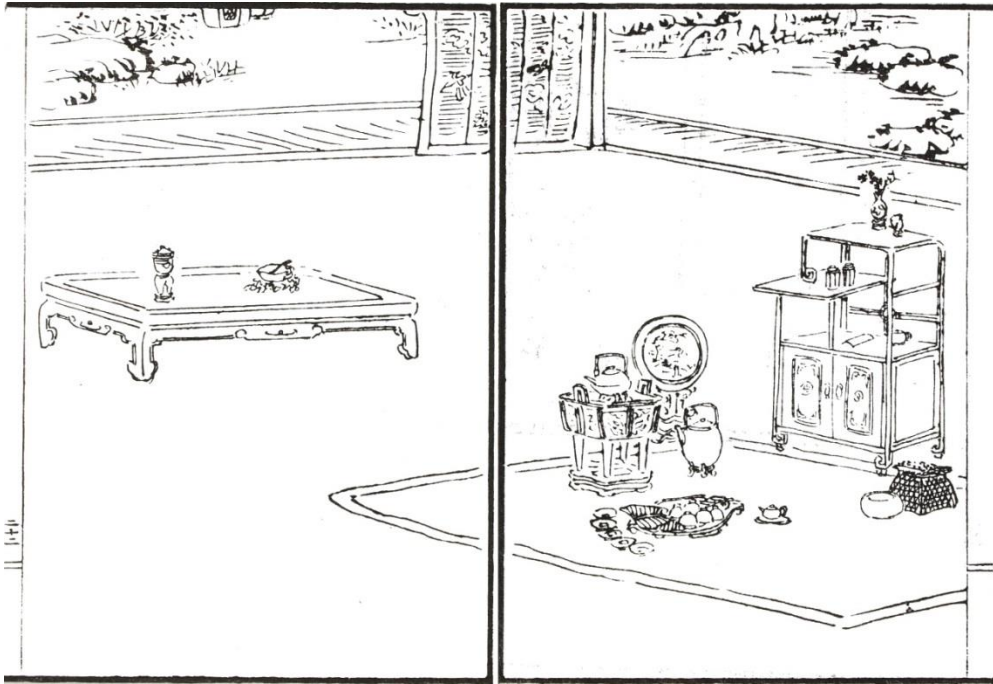


図 13：『青湾茗醺図誌』第三席 涼炉：古銅方鼎 湯鐘：黄金瓶提梁式

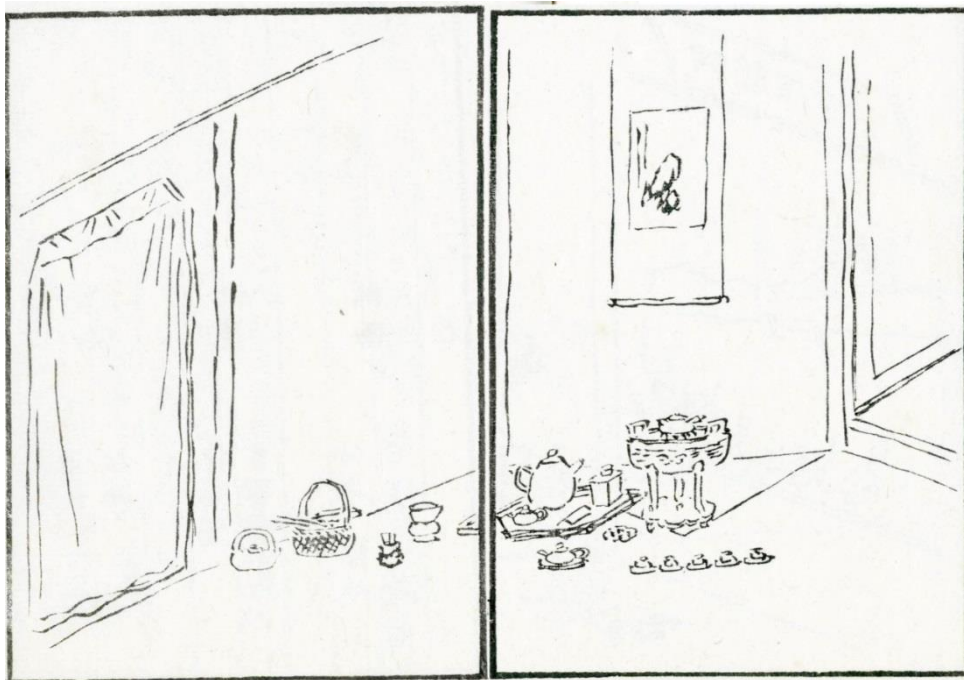


図 14：『直入翁寿筵図録』煙嵐社煎茶席 鼎：古銅饕餮文 湯鐘：磚磁俗曰チヨロキ手

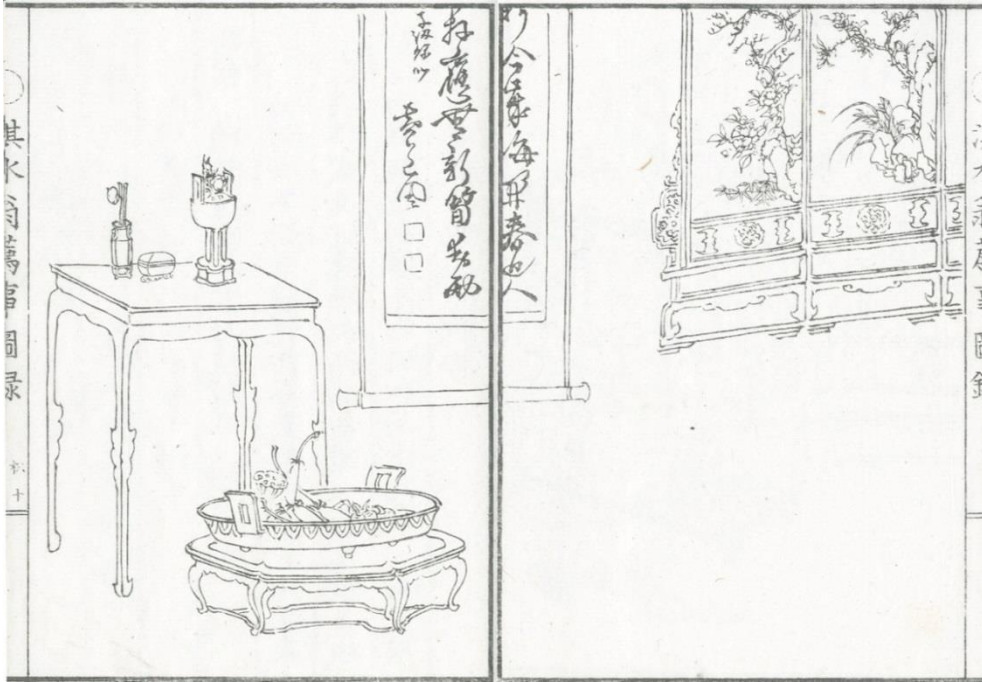


图 15：『淇水翁薦事図録』招鶴亭 茶具品目 香炉：嵌銀鼎式 石叟作

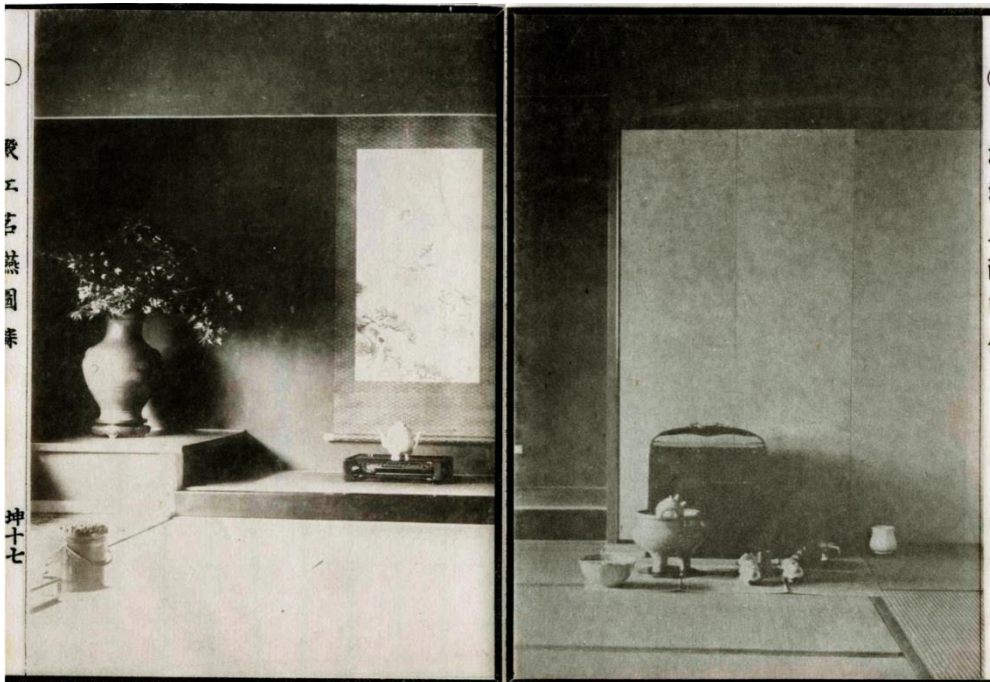


图 16：『澱江茗讌図録』第十三席 煎茶席

香炉：白玉共蓋鼎 炉：青磁繩耳鼎 湯瓶：白泥 俗称文政舶包手保富良者

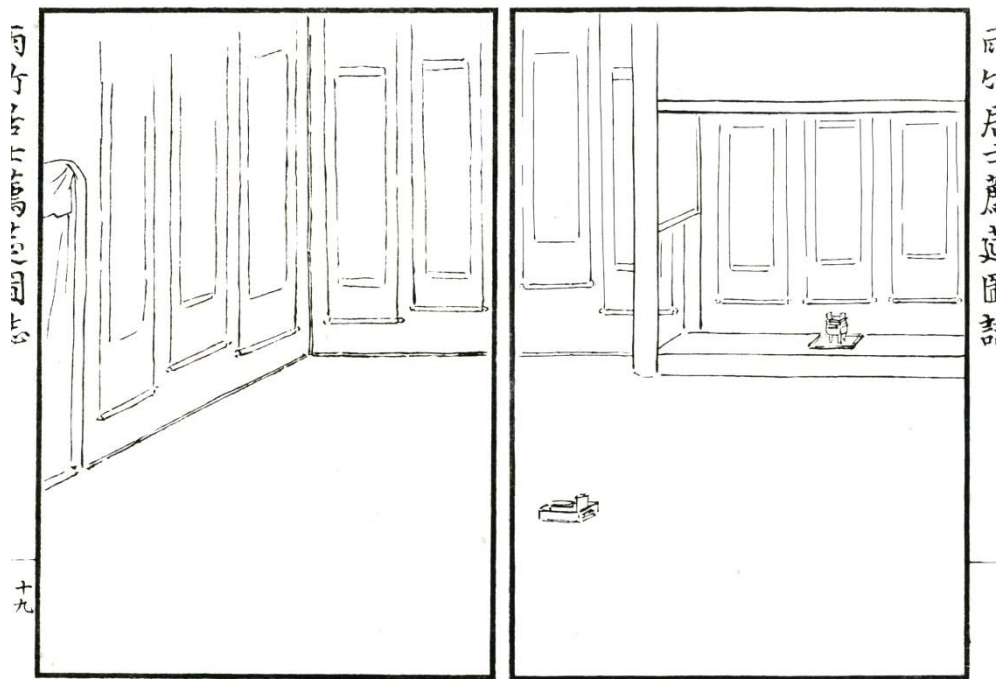


图 17：『雨竹居士薦筵図誌』第四席 書画展観 香炉：方鼎

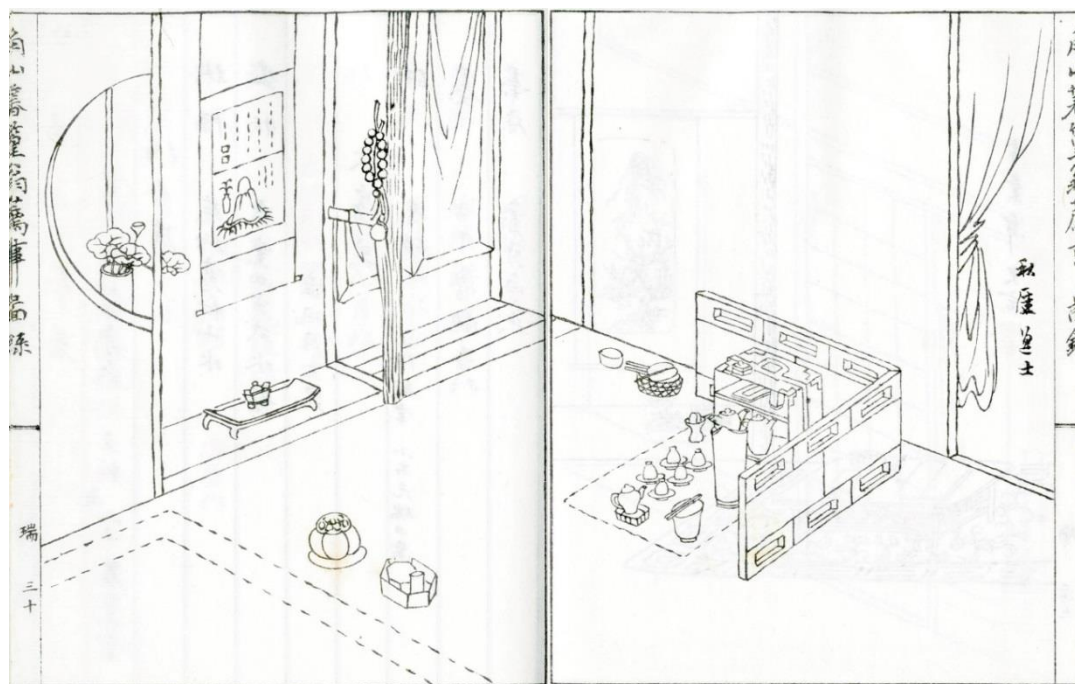


图 18：『角山簞篋薦事図録』第六席 煎茗席 香炉：南蛮鉄金象嵌方鼎

表 1：香炉として用いられた鼎

茗譙図録	香炉(鼎)	台	場所	席、目録	茗主、主幹、執事
茗譙品目	石叟製嵌銀鱗鈕鼎	黒漆座	紫檀矮几上	第一	中島竹僊
	古銅嵌銀方鼎 蓋上字漏空		天然老樹卓子上	第三	小杉秋濤
	嵌銀銅鼎		樹根天然几上	第五	玉禪室主
青湾茶会図録	青磁小鼎		天然木卓上	第四席 発汗	今堀梅實
	古銅 胡文明小鼎	檀座	古漆器泥金絵盆上	第四 発汗 副席	竹内芥山
	古銅塗金 博古図所載漢孝成鼎	檀座	檀卓上	第五席 肌清	高松舩洲、樋口凝翠
	宣徳銅 小鼎		檜机上	第五席 肌清副席 (盆栽席)	田中介居、小寺慶山、 藤井芥田、田中耕雨
	黄銅鼎 有宣徳年製字		花梨矮机上	第二席 松下園 桜亭	高津陸奴
	青磁水裂紋 小鼎		矮檀机上	第三席 任雲社	鎌田諾齋、田能村小虎
	古銅小鼎	檀座	黒漆面斑竹脚机上	第三席 任雲社	鎌田諾齋、田能村小虎
	交趾窯白磁鼎	檀座		正阿弥楼上	尾崎氏
円山勝会図録	宣銅嵌銀變紋小鼎	檀座	朱髹木瓜式盆上	阿弥之小亭	蔵六居
	古銅嵌金彝式小炉		矮卓上	鴨尾之水楼	長耳堂
	高麗白瓷小鼎式		梧桐平卓上	鴨尾之水楼	宗海堂
	青玉方鼎式		湘竹木瓜式高卓上	鴨尾之水楼	葉山堂
	宣銅小鼎	檀座	紫檀平卓上	鴨尾之水楼	大狂堂
	高麗窯白磁小鼎	檀座	烏木蕉葉盆承上	鴨尾之水楼	大坂梨雪堂
	古鉄嵌銀方鼎		紫檀蕉葉盆上	鴨尾之水楼	清森堂
青湾茗譙図誌	白玉彝式		黄楊木根天然形卓上	第二席 巽氏別業 文房品目	巖々洞瀼江
	青磁鼎式		朱漆斑竹為雷紋机上	第二席 茶席品目	巖々洞瀼江
	古銅鼎	檀座	紫檀矮几上	第三席 白山氏別業 文房品目	松島山田、西尾張橋
	宣徳銅彝式	檀座	紫檀長方几上	第十三席 網洲楼	堀井碩仙、濱名白鷗
直入翁寿筵図録	青銅鼎式饗饗文	檀座	黒漆螺鈿机上	玄關器具目録 壁間	
	青破古舶鼎式		檀西京瑞松製矮机上	別室行厨席目録	飯田陳馬、本生三紳
	古銅方鼎饗饗紋 有檀蓋	檀座	紫檀書架最上段	直入山樵揮毫席菜花園 同菜花園目録	鷺尾秋汀、真野子江、 芝田竹崖、前尾半峰
	宣徳年製鼎式 俗云袴腰	檀座	檀面梧桐廓机上	煙嵐社煎茶席 同席外堂山亭器具目録	大村大鷲、松井有香
	黄銅小鼎宣徳年製		紫檀梅花式五足舶來高卓上	水楼延寿社茗筵 同外堂器具目録	藤井幽樵
	高麗窯白磁小鼎式獸耳		紫檀矮机上	水楼延寿社茗筵 同席壁間器具目録	藤井幽樵
	嵌銀鼎式 石叟作		螺鈿長方高脚台上	招鶴亭 本席	招鶴亭
淇水翁薦事図録	白玉方鼎式 刻饗饗紋		堆朱平卓上	聴松館 第三席	聴松館
	白磁共蓋鼎		黒漆断紋中卓上	第六席	高山中簪篁堂
	古鉄金嵌鼎 明珍埋忠作		朱漆断紋平卓上	第七席	嘉納玉泉
	宋均窯耳付三足 白磁共蓋鼎		黒漆竹縁槽凹式香盆上	第十一席	遠藤魁春堂、岩田秋竹堂
雨竹居士薦筵図誌	南蛮鉄嵌金小方鼎		紫檀長方平卓上	第十三席	昌隆社
	建窯鼎式		唐物髹漆長方式卓上	第二席 遺愛品陳列	
	方鼎		存星紫檀香炉盆上	第三席 盆栽	村上一樹園
	南蛮鉄嵌金方鼎		盆上	第四席 書画展観	昌隆社
	鉄嵌金鼎式		螺鈿花鳥模様長方式香炉盆上	第九席 本席	阪上拾翠、柳川雨竹堂
角山簪篁薦事図録	南蛮鉄金象嵌方鼎		紫檀一葉式香盆上	第十一席 煎茶	遠藤魁春堂
	青磁繩耳鼎式		黒漆平卓上	第六席 煎茗席	嘉納玉泉、高山中簪篁堂
			盆上	第十三席 煎茗	昌隆社

表 2：火炉として用いられた鼎

茗譚図録	火炉、涼炉	台	湯鐘	席、目録	茗主
青湾茶会図録	銅 朝鮮製 鼎足		古鐵 形似瓢 庄兵造	第六席 清心窩 茶席	山本花曉、中川有文、 野々村二牛
岡山勝会図録	宣銅嵌銀鼎	檀座	白泥提梁式	円山正阿弥之別亭	江州梅村氏
	古銅鍍金方鼎		金銀二瓶俱提梁式	双林寺文阿弥	北條氏
	古銅鑿文紋鼎 有銘		白泥急須式	牡丹園之別亭	市田氏
	天然木鼎	檀座	純錫黄元吉造提梁式	阿弥之幽室	熊谷直行
	古銅鑿文紋鼎	檀座	泥瓶急須式	鴨厓之水楼	彝雙堂
	青磁鼎式	紫檀座	純銀鑿文紋直式	鴨厓之水楼	葉山堂
	古青瓷鼎	檀座	白泥急須式 係梅逸翁舊藏	鴨厓之水楼	大狂堂
高麗白瓷雷紋鼎	檀座	純金瓶提梁式	鴨厓之水楼	洪翠堂	
青湾茗譚図誌	古銅鼎	檀坐	白泥宝珠式 俗曰保富良者	第一席 鮎字亭	山中簪篁
	古銅方鼎	檀坐	黄金瓶提梁式	第三席 白山氏別業 文房品目	松島山田、西尾張橋
	白磁鼎		白泥急須式 (提梁式)	第十席 青湾茶寮	山田琴仙
	清水窯青苍磁		砂瓶急須式	第十二席	金芽堂
直入翁寿筵図録	古銅鑿文		磚磁 俗曰チヨロキ手	煙嵐社煎茶席 同席外堂山亭器具目録	大村大鷲、松井有香
濃江茗譚図録	均窯鼎		赫泥 俗称保富良者歎曰正上珍	第八席	嘉納鶴堂氏
	青磁繩耳鼎	豆弁楠炉座	白泥 俗称文政舶包手保富良者	第十三席	昌隆社